

審査員長 講評

川上 元美（デザイナー）

今年の3月に東日本大震災が起き、未曾有の災害に遭遇しました。悲惨な出来事でしたが、福島原発の根本処理はなにも進んでいない現状です。早期の復興を祈ると同時に、あらためて人間の知恵の及ばぬ世界に入り込む事の無謀さを思い知らされます。

ともに生きる万物の一部である人間として、謙虚に自然と共生することの重要性をひしひしと感じました。これからの私達の暮らし方のターニングポイントになるになる大きな経験を生かし、様々な意見、見解は有りましようが、徐々にでも原発から離れて、バランスの取れた生活への転換が、価値の転換が求められます。

中谷宇吉郎の恩師、寺田寅彦の「天災は忘れた頃にやって来る」という警句がありますが、宇吉郎が後に文字にして紹介し、広く知られるようになったそうです。両先達とも、自然科学者で有りますが、他ジャンルの造詣も深く、領域の融合を試みたこれら視点が増々重要になってきました。

第6回目を迎えた雪のデザイン賞、雪や氷の自然の美しい造形や現象をテーマにした、ジャンルを問わない暮らしの中のデザインコンペです。

今年は大災害などで少し応募の数が減ったとは言え、ラトビアをはじめ、国外8カ国・地域からの応募もあり、290点の作品が寄せられました。そして今年もレベルの高い作品が多く見受けられたことは嬉しい事です。一次審査は応募の画像により、47作

品が最終審査に進みました。

余談ですが、画像のみの審査は、稀に実物との差異が有り、審査員はその差異を読み込んで審査を進めるもので、審査の後の疲労感の中々のものです。

実作品による最終審査は、この科学館の一階で行いました。期待どおりの力作が、手狭な展示場に並んだ光景は、今少しのびのびとさせてあげたいと、思いが募ります。

実は毎回、一次審査の時から加賀市の町起こしや地場産業の育成で尽力されている、当地在住のデザイナーである古場田良郎さんと、富山近代美術館学芸員の稲塚展子さんに、様々なサポートのお世話になって来て居りますが、今回は、モレシャンさんが出席できず、古場田さんに最終審査に加わって頂き、精度をあげての審査会を行いました。

いつもの如く、応募作品への理解をより深めるため、一同で意見交換をしながら見て廻り、その後各審査員がこれぞと思う作品にポストイットを重点的に付けて回る方式で進行しました。

その結果、山本茜さんの截金硝子の『雪明り』が唯一の満票で、文句なしの金賞に選ばれました。

源氏物語の「薄雲」の一シーンをイメージして制作された、5角柱のガラスの間に、金箔やプラチナ箔の細かい切り文様を貼って行く、その精緻な截金の技法が、じつに人の目を射る確実さで製作され、ガラスの透明感と光の屈折による存在感が微妙に入り乱れて、不思議な世界を演出しています。雪が空を暗くして降り積もる朝の親子の分かれ

のシーンを思い、平安絵巻を彷彿とさせる雅な風情で仕上げた素晴らしい作品です。

前回から設置された韓国の化粧品会社の協賛によるラネージュ賞は、針谷崇之さんの「雪蒔絵のオーナメント」に決まりました。大小の丸く切り抜いた白蝶貝に雪の結晶文様の細密な蒔絵を施したもので、それぞれが魅力的な表情をしており、化粧用品の部分に使えないか等と、イメージが膨らみます。

銀賞は牧野広太さんの「white field」。アルミ板を鍛造で槌目を残しながら極薄に仕上げた上下2枚をアルゴン溶接して、限りなく広がる白い世界を表現した、勢いのある緊張感が心地良い、若々しい作品です。

銅賞は、近藤千愛さんの「snow grains」。雪の結晶をパーツ化したテンプレートの発想は素晴らしい、思わず手に取って雪の結晶を描いてみたいくなります。デジタルな思考をアナログで表現する面白さがあり、雪の科学館ミュージアム・グッズに最適。

奨励賞の「SNOW-SCARF」、エストニアからの Kristi Kuusk さんの作品、北国の冬、寒い夜道をこの光るスカーフを首に巻いて静かに通り過ぎる光景が浮かびます。

また栗原瑠璃華さんの「氷瀑」の川が氷るさまを、ガラスの冷え固まるさまで表現した力強い作品や、山崎純子さんのミラフィオーレの技法を発展させた「雪花」、それぞれのガラス作品が印象に残ります。

ユニークな作品、篠田望さんの雪の結晶模様を表現した「まわり階段」は影の動きも魅力的でした。ポーランドからの映像作品「Kaleidoscope」はクオリティーの高い作品

で、壊れた陶磁器がその音とともに、あたかも雪の結晶に思わせる仕掛けが見事。

他の佳作、入選を果たした作品も、それぞれの、多様な素材や技術を駆使したアイデアが凝縮した特徴的なものでした。

当館の運営が昨年春から指定管理に移行し、来春には中谷宇吉郎没後 50 年に当たりますが、記念シンポジウムや講演会等の催しが、ゆかりの加賀市を中心として、東京や札幌でも開かれます。雪のデザイン賞も回を重ね、素晴らしい作品が多く輩出して居りますが、館の増築が叶うなら、是非作品を蒐集し、世界に向けた雪の文化の発信の一助として、そして雪の科学館の、ひいては加賀市の新たなる発展を期待致します。